

伍守陽の著作活動と内丹法

——『道德眞源』所收『門人問答』と道藏輯要本『仙佛合宗語録』の比較を中心に——

吉 澤 明 希

一、はじめに——『道德眞源』本の發見

伍守陽（號：沖虛子、一五七四～？）は、明代末期の南昌出身の内丹修行者および著作家であり、全眞教の七眞の一人・邱長春（諱：處機、一一四八～一二二七）から八代目の「龍門派」後繼者を自稱した人物として知られている。彼は萬曆年間後半から崇禎年間にかけて南京の道隱齋を據點としながら、門人達に内丹を中心とする修養法を説いた。その思想や内丹法は、共に師の曹還陽（法名：常化、一五六二～一六二二？）に仕えた親族の伍守虛（號：眞陽子、生没年不詳）との共同作業により、『天仙

正理直論増註』や『仙佛合宗語録』などの著作にまとめられている。

伍守陽については、その内丹法の理論體系の整理や、彼の主張する系譜意識の分析の二つが大きなテーマとして従来論じられてきた⁽¹⁾。また彼の著作を巡る先行研究では、清代の蔣元庭（諱：予蒲、一七五六一～一八一九）により嘉慶年間に編纂された『道藏輯要』、およびそれに基づき光緒三十一年（一九〇六）に成都で再刊された『重刊道藏輯要』の畢集（第十九集）所收のテキストが、最も廣く参照されてきたと言えよう。以下、『道藏輯要』畢集での収録順序に従ってその四書を示す。

(一) 『仙佛合宗語録』

全六卷。成立年代未詳。伍守陽と道隱齋に集う門人や教友達の問答集。

(二) 『天仙正理直論増註』

全一卷。崇禎十二年(二六三九)の「本序」を有する。伍守陽の最初の著作であり、内丹法による修行過程の全容を九章構成で説く書物。

(三) 『天仙正理淺説』

全一卷。『直論増註』と同時に成立し、成書當時はその冒頭に収録されていた。初學者に向け、内丹法による成仙修行の前提となる世界観や、修行を開始する前の準備などを説く。

(四) 『伍真人丹道九篇』

全一卷。崇禎十三年(二六四〇)の「縁起」を有する。『天仙正理直論増註』で説かれなかつた祕術や口訣の詳細を九章構成で明かす書物。以下、『丹道九篇』と呼稱。これら四書のうち、『丹道九篇』と呼ばれる著作に關しては、『道藏輯要』内における書名について、本文と

の矛盾があることがすでに知られている。伍守陽自身による序には、次のような文が見える。

向に天仙正理直論九章有り、仙理の次第を敷陳すること詳明なり。茲に復た仙佛合宗語録九章を述し、一いは以て直論未だ宣べざるの祕法を闡き、一いは以て口傳の未だ洩らざるの天機を罄くす。

(向有天仙正理直論九章、敷陳仙理次第詳明。茲復述仙佛合宗語録九章、一以闡直論未宣之祕法、一以罄口傳未洩之天機。)

(『丹道九篇』、『輯要』畢集六、二十一葉表)

ここで伍守陽は、先に書き上げた『天仙正理直論増註』全九章の内容を補完する目的のため、同じく九章構成の「仙佛合宗語録」を今著すのだと述べる。しかしこの文章が『丹道九篇』の序として掲載されていることや、九章構成という特徴を踏まえるに、ここで言われる「仙佛合宗語録」とは、『道藏輯要』内に別に存在する全六卷の『仙佛合宗語録』という書物ではなく、この『丹道九篇』自體のことを指すと考えられる。つまり『道藏輯

『要』において附されている『丹道九篇』という題は、少なくともこの序が書かれた當時の書名ではなかったと推測され、伍守陽を扱う先行研究の多くで、このことは注意すべき点として繰り返し指摘されてきた。⁽²⁾

一方、『道藏輯要』内において『丹道九篇』に代わり『仙佛合宗語録』の名を冠する全六巻の書物は、伍守陽の思想を伝える最長の文献である。だが、他の著作と異なり編纂の経緯や意圖を伝える序文や跋文を含まないため、その成立過程や「仙佛合宗語録」の題を持つことになった事情は明らかではなかった。しかし、従來の研究では指摘されてこなかったことだが、『道藏輯要』内の六巻本『仙佛合宗語録』の本文には次のような箇所がある。

夫れ金丹仙道の至つて明かし難き者は、眞火眞藥なり。而るに二真人反復して言の詳しきを爲さざるを得ざるなり。我今再び語録に詳らかにするは、當時の刺血同盟の語に過ぎざるのみ。字字句句の理、皆仙師の法旨に出づ。

（夫金丹仙道至難明者、眞火眞藥也。而二真人不得不反覆爲言之詳也。我今再詳於語録、不過當時刺血同盟之語耳。字字句句之理、皆出仙師法旨。）

（『仙佛合宗語録』卷三、『輯要』畢集二、十二葉裏〜十四葉表）

伍守陽はこの箇所の直前で曹還陽とその師である李虛菴（法名・眞元、一五二五〜一六一五？）の「眞火眞藥」に關する詩の意味を解説している。そして自分が今「語録」で詳しく述べる言葉は、全て正統な「刺血同盟之語」なのだと主張する。ここでいう「語録」とは、文脈上明らかに「丹道九篇」ではなく、この六巻本『仙佛合宗語録』自體のことを指すと考えられる。つまり「仙佛合宗語録」という書名が、『丹道九篇』ではなく六巻本『仙佛合宗語録』を指すようになったのは、必ずしも清代嘉慶年間の蔣元庭の『道藏輯要』編纂の段階で何らかの操作が行われた結果などではなく、明末當時の伍守陽自身やその共同執筆者の伍守虛、もしくはその周圍にいた道隱齋關係者が、ある程度意圖してそのようにした可

能性があると推測できるのである。

ここで筆者の結論を先に述べると、次のようになる。

『道藏輯要』の『丹道九篇』は、成立当初は「仙佛合宗語録」という書名を持っており、九章構成の本編に加え、伍守陽と門人達の問答集である『門人問答』と『評古類』を附録として備えた形で一旦出版されていた。そして詳細な時期は不明だが、伍守陽や伍守虚はこの當初の『仙佛合宗語録』の附録であった『門人問答』と『評古類』に大幅な増補と再編集を施し、『道藏輯要』に見られるような全六卷の新しい『仙佛合宗語録』を形成していったのだと考えられる⁽³⁾。

全六卷構成の『仙佛合宗語録』の原形だと推測される『門人問答』および『評古類』は、従来のテキスト研究では清末光緒二十三年（一八九七）に刊行された『伍柳仙宗』内にか存在が確認されていなかったが、その内容や構成は不完全ながら『道藏輯要』の『仙佛合宗語録』の一部と符合するものだった。『伍柳仙宗』は伍守陽と清代の柳華陽（生没年不詳、嘉慶年間の人）の著作を

合刻した内丹文献として広く讀まれたが、研究上はその成立年代の新しさから、嘉慶年間成立の『道藏輯要』以上の史料價值を持ちにくい状況があった。

しかし筆者は、東洋文庫所藏の嘉慶年間の書物『道德眞源』（編者未詳、嘉慶四年「二七九九」刊行）の中に、『門人問答』と『評古類』を附録に備え、『道藏輯要』の『丹道九篇』とほぼ同一内容の本編を持つ構成の『仙佛合宗語録』が収録されていることを發見した。これにより、『丹道九篇』と『仙佛合宗語録』を別々に分ける『道藏輯要』が成立した嘉慶年間にはすでに、それと異なる書名と構成を留めたテキストが世に流通していたことが判明した。また光緒年間成立の『伍柳仙宗』に収録される『門人問答』と『評古類』は、『道德眞源』所収のテキストの存在によって、例えば『道藏輯要』の『仙佛合宗語録』から後世の人が抜粋したものではなく、むしろ伍守陽や伍守虚による再編集を受ける以前の、早い段階で一旦出版されたテキストに基づく可能性が高いと考えられるようになった⁽⁵⁾。

以上の経緯から、本稿では『道藏輯要』内で『仙佛合宗語録』と題されている全六卷の著作に着目し、主にその原形だと推測される『道德眞源』所收の『門人問答』および『評古類』との内容の比較を行うことで、編纂方針や『仙佛合宗語録』という書名に込められた意圖の一端を考察していく。

なお、『仙佛合宗語録』という著作の變遷を論じる上で重要な史料としては他にも、『藏外道書』二十四卷に収録された『天仙論語仙佛合宗』が挙げられる。これは道光二十七年（一八四七）に重刊された書物で、その内容や構成を踏まえるならば、『道藏輯要』に見られるような六卷本『仙佛合宗語録』が道隱齋の人々によってさらなる増補を受けたものと推測される。しかし『藏外道書』においては、二箇所ある序文の年代と作者名が脱落し、加えて一部に激しい錯簡が見られるなど、テキスト上の問題が多く存在する。よって取り扱いは慎重さを要するため、本稿では直接的に言及せず、詳しい考證は後に期したい。

二、各テキストについて

本稿で取り扱うテキストは以下の三種である。各本の詳しい構成については、本稿末尾の附表一に示した。

(一) 『門人問答』および『評古類』

(嘉慶四年「一七九九」刊、東洋文庫所藏)

編者未詳『道德眞源』所收『沖虚伍真人仙佛合宗語録』の附録部分。刊行年代は蔣元庭の『道藏輯要』とほぼ同時代で、伍守陽自身による崇禎七年（一六三三）の自序を含む。以下、眞源本『門人問答』および『評古類』と呼稱する。

(二) 『門人問答』および『評古類』

(光緒二十三年「一八九七」刊)

鄧徽績編『伍柳仙宗』所收『仙佛合宗』の附録部分。他の二本と比べて刊行年代に大きな隔たりがあり、字句の相違も少なくないが、基本的な構成は先述の眞源本に極めて似る。以下、仙宗本『門人問答』および『評古類』と呼稱する。

(二) 『仙佛合宗語録』(嘉慶年間刊、東洋文庫等所藏)

蔣元庭編『道藏輯要』畢集所收。全六卷。刊行年代や經緯を示す序などは含まれない。以下、輯要本『仙佛合宗語録』と呼稱する。

『門人問答』および『評古類』の眞源本と仙宗本は、字句の相違を除けば基本的な構成や内容を共有している。その一方、輯要本『仙佛合宗語録』には、先の二本にない夥しい數の自注が全篇に附されている。また、本文にも大幅な書き換えや増補が行われたと見られる箇所が多數存在する。一方、『道藏輯要』内で『丹道九篇』と題された文献と、眞源本・仙宗本の本編に當たる九章構成の部分は、字句の差異もほぼなく、各テキスト間で同一の内容が保たれていることが確認できた(附表二を参照)。以降、これら九章の内容に觸れる時は便宜的に『丹道九篇』と呼稱する。このこともまた、『門人問答』および『評古類』と輯要本『仙佛合宗語録』の間の差異が、意圖的かつ大規模な再編集作業によってもたらされたことを示唆している。

三、仙佛一致の主張の強化

眞源本・仙宗本『門人問答』および『評古類』の中に見られず、輯要本『仙佛合宗語録』において追加されている文章の特徴として、まず挙げられるのは膨大な古語の引用である。特に佛典への言及の増加が顯著であり、ここでは實例として『楞嚴經』と『華嚴經』について述べていく。⁽⁶⁾この二つの經典は『門人問答』においてそれぞれわずかに一箇所ずつ、具體名を擧げて言及されている。

以ふに其の初めて養胎するの時、呼吸無きが似し。而るに又た呼吸有るが似し。胎孕みて將に産まれんとする時の若く、生滅の相尚ほ在り、出入の迹猶ほ存す。二乗と名づけ、又た如來と名づく。之を理の如くして來たり、理の如くして去ると謂ひ、故に如來と曰ふ。天仙の道は微妙にして知るべきこと難く、而るに華嚴の言は驗すべからざらんや。(中略) 仙家之を胎成と謂ひ、而る後に脱胎して出神す。所以

に楞嚴經に云ふ、既に道胎に遊び、親しく覺胤を奉ずれば、胎已に人相を成して缺けざるが如しと。⁽⁷⁾ 身心合成すれば、日に益増長す。

(以其初養胎之時、似無呼吸矣。而又似有呼吸。若胎孕將產時、生滅之相尙在、出入之迹猶存。名二乘、又名如來。謂之如理而來、如理而去、故曰如來。天仙道微妙難可知、而華嚴之言不可驗乎。(中略) 仙家謂之胎成、而後脫胎出神。所以楞嚴經云、既遊道胎、親奉覺胤、如胎已成、人相不缺。身心合成、日益增長。)

〔門人問答〕、『道德眞源』卷下、

四十葉裏、四十一葉裏)

しかし輯要本『仙佛合宗語錄』の本文と注全體において、『楞嚴經』の引用は二十箇所、『華嚴經』の引用は三十六箇所に増加している。この引用数は、伍守陽の他の著作である『天仙正理直論増註』などと比較しても格段に多く、輯要本『仙佛合宗語錄』が道教文献のみならず佛典も積極的に用いながら自説を展開する性質の書物であることを示している。以下は『門人問答』に元々存在

しなかつた引用が、輯要本『仙佛合宗語錄』において追加されている例である。以降本稿においては、二書の文章を比較する際、先に眞源本『門人問答』を示し、次に輯要本『仙佛合宗語錄』の對應箇所を示すこととする。

即ち神炁同に動くこと是れなり。動きて外に馳せざれば、則ち二と爲る。動きて妄りに馳せざれば、則ち二と爲る。清淨にして眞に非ざれば何ぞや。元神一たび馳すれば、精氣一たび馳す。元神一たび染むれば、精氣一たび敗れる。濁に非ざれば何ぞや。

(即神炁同動是也。動而外馳逐妄、則爲二。動而不妄馳、猶然合一。非清淨眞而何。元神一馳、精氣一馳。元神一染、精氣一敗。非濁而何。)

〔門人問答〕、『道德眞源』卷下、二十五葉裏)

即ち神炁同に動くこと是れなり。動きて外に馳せ妄を逐へば、則ち二と爲る。動きて妄りに馳せざれば、猶然として一に合す。眞清なることの同じきに非ざれば何ぞや。元神一たび馳すれば、炁も亦た馳す。

元神一たび染むれば、精炁も亦た耗く。濁なることの同じきに非ざれば何ぞや。即ち元始天尊得道了身經に云ふ、意定まりて神全ければ水源清く、意動きて神行れば水源濁るの説なり。陳虛白云ふ、心動けば則ち神は炁に入らず、身動けば則ち炁は神に入らずと。故に我が丘祖眞人も亦た心地に工を下し、全く世事を抛つの旨有る在りなり。楞嚴經にも亦た云ふ、塵既に緣らず、根偶する所無ければ、反流して一を全うし、六用行らずとは、是れなり。

(即神炁同動是也。動而外馳遂妄、則爲二。動而不妄馳、猶然合一。非眞清之同而何。元神一馳、炁亦馳。元神一染、精炁亦耗。非濁之同而何。即元始天尊得道了身經云、意定神全水源清、意動神行水源濁之説也。陳虛白云、心動則神不入炁、身動則炁不入神。故我丘祖眞人亦有心地下工、全抛世事之旨在也。楞嚴經亦云、塵既不緣、根無所偶、反流全一、六用不行、是也。)

〔『仙佛合宗語録』卷一、『輯要』畢集一、

十葉裏、十一葉裏)

輯要本『仙佛合宗語録』においては、この箇所『門人問答』にはなかつた古語の引用がいくつか追加されており、その中に楞嚴經の名が見える。同様の例として次のような箇所が挙げられる。

行らすことの太だ速ければ、則ち蕩に近くして調はず。行らすことの太だ緩ければ、則ち有相の炁に墮して必ず大病を成す。古へに所謂呼吸を煉るに非ざるの炁とは、是れなり。亦た調はざるなり。

(行之太速、則近蕩而不調。行之太緩、則墮有相之炁而必成大病。古所謂非煉呼吸之炁、是也。亦不調也。)

〔『門人問答』、『道德眞源』卷下、二十七葉表)

行らすことの太だ速ければ、則ち蕩に近くして調はず。行らすことの緩ければ、則ち有相の呼吸の氣を滯らせて必ず大病を成す。古へに所謂呼吸を煉るに非ざるの炁とは、是れなり。亦た調はず。華嚴經に云ふ、如來の行く所の道を踐むを爲し、遅からず速からず、審諦して經行すとは、是れなり。

(行之太速、則近蕩而不調。行之緩、則滯有相之呼吸氣

而必成大病。古所謂非煉呼吸之氣、是也。亦不調。華嚴經云、爲踐如來所行之道、不遲不速、審諦經行、是也。）

（『仙佛合宗語錄』卷一、『輯要』畢集一、十九葉裏）

このようにして、『門人問答』に對し輯要本『仙佛合宗語錄』の側で佛典からの引用が増加している原因には、新しく追加された問答の中に、仙道と佛教の一致についての話題が數多く含まれることも關係している（附表三所載の二十例を参照）。その内容は、二教の死生觀や世界觀の整合性を語る（例十三など）ものや、仙道と佛教とは修行法を一にするが、その説き方が異なるために兩者の門戸は分かれてしまっているのだと述べる（例二など）ものなど、多岐に渡る。

元來「仙佛合宗語錄」の題を冠していた『丹道九篇』では、章ごとに仙道の祕訣を一通り解説した後、終わりに必ず「佛宗云（中略）合此宗也」という表現により佛教の古語を引用し、仙道と佛教の一致を主張して締めくくる形式が取られていた。しかし、そこで典據となる具

體的な經典名や人名が示されることはなく、引用される語句もごく短いものに限られる。また、輯要本『仙佛合宗語錄』のように同じ章内の複数個所に渡って經典を引用することもない。このような特徴からも、『門人問答』および『評古類』から派生した輯要本『仙佛合宗語錄』には、『丹道九篇』とは異なる表現方法で仙道と佛教の一致の主張に根據を持たせようとする編纂意圖が込められていると推測できる。

四、「當採之眞時」について

本項では、内丹法の理論についての記述が輯要本『仙佛合宗語錄』と眞源本・仙宗本『門人問答』の間でどのように變化しているのかを述べる。明らかに言及回数が増えているのは、「當採」の時という用語である。この概念は、内丹による修行の初段階に當たる「百日煉精化炁」（小周天）の工の開始に關わるものである。妄念を取り去って心を靜慮にしていると、金丹の源となる眞陽の精が自然と體內に生じてくる時機があるが、それを神

(意識)で把握する「當採時」の眞機を知らなければ、丹藥を煉り始めるのに適切な時を逃してしまふとされる。この話題について、眞源本『門人問答』の文章から明らかな改變が見られる箇所を以下に示す。

故に猫を以て主人に喩へ、鼠を以て塵障に喩ふ。但だ鼠を捕へて塵を掃するは、皆小成の有爲の事なるのみ。此を過ぎて必ず猫を忘れ鼠を忘れ、無虚にして無我なれば、而る後に可なり。

(故以猫喩主人、以鼠喩塵障。但捕鼠掃塵、皆小成有爲之事耳。過此而必忘猫忘鼠、無虚無我、而後可也。)

〔門人問答〕、『道德眞源』卷下、二十九葉表)

故に猫を以て主人に喩へ、鼠を以て眞陽の藥物に喩ふ。但だ鼠を捕へて採藥に喩ふるは、乃ち初關の有爲の事なるのみ。此を過ぎて必ず猫を忘れ鼠を忘れ、探るに非ず捕ふるに非ざれば、而る後に了道と稱すべし。我今又た子の爲に其の始を原ぬれば、當に鼠の來たるに候有り、即ち藥の生ずるに機有ることを知るべし。若し眞陽生ずるの機を辨すること能はざ

れば、何をか將て能く其の眞機に當たらん。則ち之を猫の空窟を守るが如しと謂ふ。若し陽生ずるの眞機を知ること有るも、當に採るべきの時の眞機を知らざれば、歸根し復命するを得ること能はず、徒然として枯坐頑空すれば、則ち亦た之を猫の空窟を守るが如しと謂ふ。

〔注〕身心に自然の生機有りと雖も、總べて一個の當面錯過を成す。〕

此れ又た當に癡猫と爲るを防ぐべき所以なり。

(故以猫喩主人、以鼠喩眞陽藥物。但捕鼠喩採藥、乃初關有爲之事耳。過此則必忘猫忘鼠、非採非捕、而後可稱了道。我今又爲子原其始、當知鼠來有候、即藥生有機。若不能辨眞陽生機、將何能當其眞機。則謂之如猫守空窟。若有知陽生眞機、而不知當採時眞機、不能得歸根復命、徒然枯坐頑空、則亦謂之如猫守空窟。)

〔注〕雖有身心自然生機、總成一個當面錯過。〕

此所以又當防爲癡猫也。)

〔仙佛合宗語錄』卷一、〔輯要』畢集一、二十八葉表(裏)

これは内丹における鼠を捕らえる猫の比喻の意味を解説する部分だが、輯要本『仙佛合宗語録』では傍線部の文章に眞源本『門人問答』から改變と加筆が施されており、異なる説明がなされている。『門人問答』では、鼠は修行の初段階で心から取り除くべき「塵障」のこととして解説されるが、輯要本『仙佛合宗語録』では反對に、適切なタイミングで採取すべき體内の「眞陽藥物」の比喻だとされている。百日煉精化炁の工を始める際の「採藥」の工夫を行うのに相應しい「眞機」を判別することの重大さが、ここでは説かれている。

また、同じく「當採之時」（發生した眞陽の精の採取を行うべき時機）の重要性を強調する形で文章が改變されている箇所が次の例である。

或いは來たるも力以て關を通るに足らず、是れ水源の清眞ならずして火の未だ當に止むるべきの候に及ばざるの病なり。

（或來而力不足以通關、是水源之不清眞而火未及當止之候之病也。）

（『門人問答』、『道德眞源』卷下、三十四葉裏）

或いは藥の來たるを得て、而るに力以て關を通るに足らず、是れ水源の初を知るも、未だ調藥するを知らず、當に採るべきの時に及ばずして炁微かなるの病なり。藥の來たるを得と雖も、猶ほ是れ氣微かにして力弱く、關を衝きて大道を成すこと能はず。

〔注〕藥生するの時、之を採すること太だ早ければ、則ち眞ならずして炁の微かなるを生ず。〕

（或得藥來、而力不足以通關、是知水源之初、未知調藥、不及於當採之時而炁微之病。雖得藥來、猶是氣微力弱、不能衝關而成大道。）

〔注〕藥生時、採之太早、則不眞而生炁微。〕

（『仙佛合宗語録』卷一、『輯要』畢集一、五十二葉表）

ここでは、下丹田を中心とした煉精化炁の工が終わった時、次の段階へ進むべく、その成果物である大藥を背面に存在する三關（尾閭・夾脊・玉枕）に通し、頭頂部へ移動させようとするもうまくいかなない場合の原因が語られている。眞源本『門人問答』では、水源の清濁に問

題があつた（煉精化炁を始める前に心に妄念があつた）ことや、體內に精炁を巡らせる小周天の工を、止めるべきでない時に止めてしまったことが擧げられている。一方、輯要本『仙佛合宗語録』ではそれらの説ではなく、適切でない時に（「不及於當採之時」）煉精化炁の素となる陽精を採り、その後の工夫を進めてしまったので、結果的に大藥として仕上がつた炁が弱々しく、三關の通過に耐えられる状態ではなくなつたのだと説いている。

それでは輯要本『仙佛合宗語録』がこのように、百日煉精化炁の工の開始に關わる「時」を強調するのは何故だろうか。その手がかりとしては『丹道九篇』の跋文が参照できる。

斯の録や、龍門の秘法天機を備へ、邱祖の龍門仙派の録を續ぐなり。（中略）直論の人人見るべきに比はざるなり。百日功の成る者を須ちて、方めて之を附すべし。

（斯録也、備龍門秘法天機、續邱祖龍門仙派之録也。
（中略）不比直論人人可見也。須百日功成者、方可附之。）

『丹道九篇』、『輯要』畢集六、三十七葉表裏）

この箇所で伍守陽は、『丹道九篇』を讀ませるべき人物に一定の條件を課しており、その一つが、百日煉精化炁の工をすでに成功させていることだつた。先述したように、『道藏輯要』内で『丹道九篇』と名附けられた九章は、眞源本・仙宗本においては『仙佛合宗語録』の本編を擔つていた。それゆえ、その附録であつた『門人問答』および『評古類』もまた、基本的に煉精化炁の工をすでに終えた者が讀むものとして想定されており、「採藥」の時機についてさほど詳言する必要がなかつたのではないだろうか。

だが『門人問答』および『評古類』を、輯要本のようにな六卷本『仙佛合宗語録』へ再編する際に、體內の炁の煉成の出發點と言つてよい「採藥」の時機の大切さの説明を省いてしまうと、その後には續く全ての工夫が立ち行かなくなるといふ判断がなされた可能性がある。それにより、輯要本『仙佛合宗語録』には眞源本『門人問答』の文章を意圖的に書き改め、「採藥」の時機への言及を

増やした痕迹が見られると考えられるのである。

五、「金蓮法眷」について

次に載せる問答もまた、眞源本・仙宗本『門人問答』には収録されておらず、輯要本『仙佛合宗語録』にて追加されたものである。問答の題材となっているのは、前項で述べた「當採之時」に眞陽の精を採取する時機を合わせることを指す「調藥」という語である。

又た問ひて曰く、古へ従り以來、但だ調息して火候を爲すを言ふのみにして、未だ調藥を言はざるも、今又た何ぞ始めて此の言有ると。答へて曰く、此れ萬聖萬眞の至祕の天機なり。只だ前聖高眞の天尊の科禁を奉持し、之を祕して敢へて輕言せざる者を爲すなり。後の聖眞の道を成す者は、皆必ず此れを得るに由る。世俗の小根の此れを得ざる者は、即ち道を成すこと能はざるなり。我が輩は金蓮法眷なり。曠き却従り修め來たるも、必ず未だ此の句を得ざるに因れば、則ち眞に長生不死なるべきの元炁を得ず、

成仙し了道すること能はず。直だ今生に至りて、幸ひに老師曹還陽眞人の云ふ、忙裏に閑を偷みて外藥を調へ、無中に有を生じて先天を採すの句を聞くを得ること有り、是れ李虛菴眞人の口授して來たる天仙金丹の祕訣なり。

（又問曰、從古以來、但言調息爲火候、未言調藥、而今又何始有此言。答曰、此萬聖萬眞至祕之天機也。只爲前聖高眞奉持天尊科禁、祕之不敢輕言者。後之聖眞成道者、皆必由於得此。世俗之小根不得此者、即不能成道也。我輩金蓮法眷也。從曠却修來、必因未得此句、則不得眞可長生不死之元炁、不能成仙了道。直至今生、有幸得聞老師曹還陽眞人云、忙裏偷閑調外藥、無中生有採先天之句、是李虛菴眞人口授來天仙金丹之祕訣也。）

（『仙佛合宗語録』卷一、『輯要』畢集一、五十七葉表）
この問答では、「調藥」が彼らの法脈に代々傳授される重要な祕訣であることが語られ、その系譜意識が「金蓮」という言葉によって表現されている。この「金蓮」

という語が彼らの信じる法脈の正統性を主張する文脈で使われている例は『門人問答』にはなく、輯要本『仙佛合宗語録』内の三箇所だけがそれに該当する。⁽¹⁰⁾ 残りの二箇所は、師である曹還陽の詩を伍守陽が解説するという内容の問答の注や本文に含まれている。しかし、この詩は後半の字句が眞源本・仙宗本『門人問答』と輯要本『仙佛合宗語録』の間で大きく異なっており、輯要本でのみ「蓮」と「金」の字が用いられている。この詩の字句の改變は、「金蓮」の語を解説するという目的のために行われた可能性が高い。

一陽の初動は無心に本づき、有心の撥動は南針を指す。仔細に爐に臨みて老嫗を分かち、土釜に送歸して姻親を結ぶ。

(一陽初動本無心、有心撥動指南針。仔細臨爐分老嫗、送歸土釜結姻親。)

(『門人問答』、『道德眞源』卷下、四十四葉表)

一陽の初動は無心に本づき、有心の撥動は南針を指す。箇の牛眠を得て烝穴に藏し、活墓に蓮の開くこ

と七朶の金なり。

(注：(前略) 蓮の開くこと七朶の金なりとは、純陽の下降して重陽を度せし時、目を東に擧げ海邊を觀て、空中に七朶の金蓮の現出するを見せしむるなり。純陽又た曰く、豈に但だ七朶のみならんや。還た萬朶の金蓮有りと。道成るに及びて東に至り、乃ち丘劉談馬郝王孫の七眞を度す。而して預め報兆と爲るなり。故に門下の後人金蓮正宗書を作りて、以て之を記す。昔世尊、地に金蓮湧く。重陽眞人、虚空に金蓮湧く。唯だ佛法を演説し、全眞正教を開立し、浩浩たる無極劫に至るは、重陽眞人自り始まり、後來の法眷故に皆之に遵ひ、而して仙佛二宗始めて能く一に合し眞修を爲すなり。)

(中略) 故に併びに此の語を書き、以て吾が金蓮正宗の後人の考證する所と爲す。

(一陽初動本無心、有心撥動指南針。得箇牛眠藏烝穴、活墓蓮開七朶金。

(注：(前略) 蓮開七朶金者、純陽下降度重陽時、令擧

目東觀海邊、見空中現出七朵金蓮。純陽又曰、豈但七
朵。還有萬朵金蓮。及道成至東、乃度丘劉譚馬郝王孫
七眞。而預爲報兆也。故門下後人作金蓮正宗書、以記
之。昔世尊、地湧金蓮。重陽眞人、虛空湧金蓮。唯演
說佛法、開立全眞正教、至于浩浩無極劫者。自重陽眞
人始、後來法眷故皆遵之、而仙佛二宗始能合一爲眞修
矣。〴

(中略) 故併書此語、以爲吾金蓮正宗後人之所考證。

(『仙佛合宗語錄』卷三、『輯要』畢集二、

十一葉表、十四葉裏)

伍守陽はここで、全眞教を開いた王重陽(諱：暹、一
一一三―一一七〇)と佛教を開いた世尊が、共に「金蓮」
にまつわる傳説を持つことを述べ、仙宗と佛宗の兩者の
根本が同じであること、またそれを自らの法系が繼承し
ていることを主張する。王重陽が七眞を象徴する金色の
蓮を空中に見たという傳承自體は、次に載せる元代の
『金蓮正宗記』(SN一七三、H一七三)などに見られ、
初期全眞教においてよく知られたものだった。

密かに眞訣を授かり(中略) 既に畢はりて東方を指
して曰く、汝何ぞ之を觀ざらんと。先生首を回らせ
て望む。道者曰く、何を見ると。曰く、七朵の金蓮
の子を結ぶを見ると。道者笑ひて曰く、豈に是くの
如きに止まるのみならんや。將に萬朵の玉蓮有らん
とす。芳しきかなと。(中略) 祖師遂に東して海邊
に歸し、徜徉すること數載にして、接誘して訓化し、
既に丘劉譚馬郝孫王を得て、以て七朵の金蓮の數を
滿たすに足る。

(密授眞訣(中略) 既畢指東方曰、汝何不觀之。先生回
首而望。道者曰、何見。曰、見七朵金蓮結子。道者笑
曰、豈止如是而已。將有萬朵玉蓮。芳矣。(中略) 祖師
遂東歸海邊、徜徉數載、接誘訓化、既得丘劉譚馬郝孫
王、以足滿七朵金蓮之數。)

(秦志安『金蓮正宗記』卷二、二葉表、五葉表)

一方、伍守陽が世尊に關するものとして引いている
「地湧金蓮」の語の最古の用例は、北宋の『景德傳燈錄』
にある。

普耀經に云ふ、佛初めて刹利王家に生まるるに、大智の光明を放ちて十方世界を照らし、地に金蓮華涌きて自然と雙足を捧ぐと。

(普耀經云、佛初生刹利王家、放大智光明照十方世界、地涌金蓮華自然捧雙足。)

(永安道原纂『景德傳燈錄』卷一、大正藏第五十一冊、二〇五頁中)

『傳燈錄』はその典據を「普耀經」とするが、現存する西晉の竺法護譯の『佛說普曜經』のテキストには該當する字句はない¹⁾。だが南宋以降の禪宗の語録にはこの語を載せる例が複数あり、明初の洪武年間に編纂された『續傳燈錄』にもその一つが見える。

問ふ、世尊世に出づるに、地に金蓮涌く。和尚世に出づるに、何の祥瑞有るかと。

(問、世尊出世、地涌金蓮。和尚出世、有何祥瑞。)

(圓極居頂纂『續傳燈錄』卷十九、大正藏第五十一冊、五六三頁下)

しかし筆者が調べる限り、この言葉を全眞教の王重陽

の「金蓮」と重ね合わせようとする發想は、伍守陽の著作以外に見られるものではなかった。また注意すべきは、仙宗と佛宗兩者の正統を繼ぐことの象徴としての「金蓮」の用例は、いずれも輯要本『仙佛合宗語録』のみに見られ、眞源本・仙宗本『門人問答』には含まれていないことである。これも先に挙げた佛典からの引用の増加と竝んで、仙道と佛敎の一致の主張にさらなる根據を加えようとする編纂意圖を示すものだと考えられる。

六、おわりに——「仙佛合宗」を巡って

眞源本『門人問答』および『評古類』と輯要本『仙佛合宗語録』の比較を通して明らかになるのは、後者が前者に基づきながらも、「仙佛合宗語録」という書名に相應しく仙道と佛敎の一致を強調する内容となるよう、明確な意圖をもって再編集されたものだということである。裏を返せば、輯要本『仙佛合宗語録』に含まれる佛典の引用、また仙佛一致の主張の多くは後から附け足されたものであり、内丹に基づく修行法を説く上で絶對的に必

要な記述ではなかったとも言える。

しかしながら伍守陽をはじめとする道隱齋の人々の間では、後に『丹道九篇』と呼ばれる最初の『仙佛合宗語録』が書かれて以降、この「仙佛合宗」という發想に對する關心が時と共に高まっていき、それが『門人問答』および『評古類』の再編集と増補という営みに結びついたのだと推測される。以上のことを踏まえて、今後は今回扱えなかった『天仙論語仙佛合宗』などのテキストを用いつつ、伍守陽とその門人達が何故「仙佛合宗」という發想に拘る必要があったのかという問題について、より考察を深めていく必要があると思われる。

【主要参考文献（年代順）】

- ・ 石田志穂「伍守陽の内丹思想における周天法と「光」筑波大學哲學・思想學會編『哲學・思想論叢』二十一號、二〇〇三a
- ・ 石田志穂「明清内丹思想史における「光」の展開——伍柳派を軸として」日本道教學會編『東方宗教』一百一號、二〇〇三b
- ・ 横手裕「禪と道教——柳華陽の場合」岩波書店編『思想』九百六十號、二〇〇四
- ・ 丁常春「伍守陽内丹思想研究」巴蜀書社、二〇〇七
- ・ 森由利亞「伍守陽龍門派の正統意識と祕傳——『丹道九篇』の祕術の位相をめぐって」『東方宗教』一百十六號、二〇一〇
- ・ 長澤志穂「明清道教内丹文獻と『楞嚴經』：『仙佛合宗語録』と『太乙金華宗旨』の場合」（南山大學大學院神學研究室『南山神學・別冊』二十八號、二〇一三）
- ・ Paul G. G. van Enckevort “Quanzhen and Longmen Identities in the Works of Wu Shouyang.” Liu Xun & Vincent Goossaert, eds, *Quanzhen Daoists in Chinese Society and Culture, 1500-2010*. Berkeley, 2013.
- ・ Paul G. G. van Enckevort “The Three Treasures: An Enquiry into the Writings of Wu Shouyang.” *Journal of Daoist Studies*, vol.7, 2014.
- ・ 森由利亞「全眞教龍門派系譜考——『金蓋心燈』に記された龍門派の系譜に關する問題點について」道教文化研究會編『道教文化への展望：道教文化研究會論文集』平河出版社、一九九四
- ・ 柳希泰主編『中國道教史』四川人民出版社、一九九五
- ・ 横手裕「道教の修行法と内丹法」坂口ふみ他編『宗教の關』岩波書店、二〇〇〇

(本論文は、早稲田大学において二〇一九年十一月九日に開催された日本道教學會第七十回大會にて口頭発表した原稿を改訂したものである。)

註

- (1) 前者の研究としては近年丁常春「伍守陽内丹思想研究」(巴蜀書社、二〇〇七)、横手裕「道教の修行法と内丹法」(坂口ふみ他編『宗教の闇』岩波書店、二〇〇〇)および「禪と道教——柳華陽の場合」(岩波書店編『思想』九六〇号、二〇〇四)、石田志穂「伍守陽の内丹思想における周天法と「光」」(筑波大学哲学・思想學會編『哲学・思想論叢』二十一号、二〇〇三a)および「明清内丹思想史における「光」の展開——伍柳派を軸として」(日本道教學會編『東方宗教』一〇一號、二〇〇三a) Paul G. G. van Enckevort “The Three Treasures: An Enquiry into the Writings of Wu Shouyang.” (*Journal of Daoist Studies*, vol.7, 2014) などが存在する。後者の研究としては森由利亞「伍守陽龍門派の正統意識と祕傳——『丹道九篇』の祕術の位相をめぐって」(『東方宗教』一一六號、二〇一〇)や Paul G. G. van Enckevort “Quanzhen and Longmen Identifies in the Works of Wu Shouyang” (Liu Xun & Vincent Goossaert, eds., *Quanzhen Daoists in Chinese Society and*

Culture, 1500–2010, Berkeley, 2013) が挙げられる。

- (2) 『道藏輯要』における『丹道九篇』が本来は「仙佛合宗語録」だった可能性を指摘する研究の例を、以下年代順に挙げる。森由利亞「全真教龍門派系譜考——『金蓋心燈』に記された龍門派の系譜に關する問題點について」(道教文化研究會編『道教文化への展望・道教文化研究會論文集』平河出版社、一九九四)、二〇五―二〇六頁注。楊銘・唐大潮著、卿希泰主編『中國道教史』卷四(四川人民出版社、一九九五)、第十一章第二節、四十一―四十四頁。丁(二〇〇七)、三十三―三十二頁。森(二〇一〇)、二十四頁。長澤志穂「明清道教内丹文獻と『楞嚴經』・『仙佛合宗語録』と『太乙金華宗旨』の場合」(南山大学大学院神學研究室『南山神學・別冊』二十八號、二〇一三)、四頁注。Enckevort (2013), p.154注。
- (3) 長澤(二〇一三)も、『伍柳仙宗』所収の『門人問答』を元に同様の説を述べている(四頁注)。「道藏輯要」の全六卷構成の『仙佛合宗語録』の内容が『伍柳仙宗』所収の『門人問答』と不完全ながら一致することや、成書當初は『門人問答』などの題で世に知られていた可能性自體は、森(一九九四)で早くから論じられていた(二〇五―二〇六頁注)。
- (4) 丁(二〇〇七)、三十一頁―三十二頁。
- (5) Enckevort (2013) ㉔『丹道九篇』は元々『仙佛合

『宗語録』から一部の問答を抜粋して後から作られた書物
 なのではないかという説を示している(註)。筆者もかつて修士論文「伍守陽の煉丹術に見る実践と生
 活」にて、その假説に同意していた(九〜十頁)。しか
 し、嘉慶年間の『道德真源』所収本の発見により認識を
 改め、『丹道九篇』の文章や構成は早くから確立されて
 おり、むしろ『道藏輯要』所収の『仙佛合宗語録』の方
 が遅れて成立した書物だと考えるに至った。

(6) 『道藏輯要』の『仙佛合宗語録』における『楞嚴經』
 の引用については、長澤(二〇一三)が考察している。

(7) 『首楞嚴經』卷八に「既に道胎に遊び、親しく覺胤を
 奉すれば、胎已に人相を成して缺けざるが如し。方便具
 足住と名づく(既遊道胎、親奉覺胤。如胎已成人相不缺。
 名方便具足住)」(大正藏第十九冊、一四二頁中)とある。

(8) 『首楞嚴經』卷八に「阿難是くの如く清淨に禁戒を持
 す。人心婬を貪ること無ければ、外に於いて六塵流逸す
 ること多からず。流逸せざるに因りて、元に旋して自ら
 歸す。塵既に縁らず、根偶する所無ければ、反流して一
 を全うし、六用行らず(阿難如是清淨持禁戒。人心無貪
 婬、於外六塵不多流逸。因不流逸、旋元自歸。塵既不縁
 根無所偶、反流全一、六用不行)」(大正藏第十九冊、一
 四一頁下)とある。

(9) 『大方廣佛華嚴經』卷六十五に「如來の行く所の道を

踐むを爲し、遅からず速からず、審諦して經行す(爲踐
 如來所行之道。不遲不速。審諦經行)」(大正藏第十冊、
 三四九頁下)とある。

(10) Enclevort (2013) も同じく、伍守陽が自らの法脈の
 正統性を「金蓮」の語で表現する場合があることに觸れ
 ている(二五一頁〜一五二頁)。

(11) ただし、唐の地婆訶羅による異譯である『方廣大莊嚴
 經』卷二には、「佛、諸の比丘に告ぐ。菩薩入胎の夜、
 下は水際従り蓮花涌出し、穿ちて地輪を過ぎ、上は梵世
 に至る(佛、告諸比丘。菩薩入胎之夜、下従水際涌出蓮
 花、穿過地輪、上至梵世)」(大正藏第三冊、五五〇頁
 上)という箇所がある。しかし、ここでは發生する蓮華
 の色については具體的に表現されていない。

【附表一】輯要本『仙佛合宗語録』に關連する各テキストの構成

①『門人問答』および『評古類』 『道德眞源』所收 『沖虛伍真人仙佛 合宗語録』の附録	②『門人問答』および『評古類』 『伍柳仙宗』所收 『仙佛合宗』の附 録	③『仙佛合宗語録』 (全六卷) 『道藏輯要』(嘉慶 年間)畢集所收	
○	○	○「吉王朱太和十九問」※實際に収録される問答数は十個	吉王朱太和との十問答
×	×	○「和吉王朱太和詩二首」	吉王朱太和に與える詩歌二首
○※輯要本『仙佛合宗語録』における六問目を缺く	○※輯要本『仙佛合宗語録』における六問目を缺く	○「伍太初六問」	伍太初との五または六問答
○※問答の収録順序が輯要本『仙佛合宗語録』と異なる	○※問答の収録順序が輯要本『仙佛合宗語録』と異なる	○「伍太一十九問」	伍太一との十九問答(一問目～十問目)
×	×	○「伍太一十九問」	伍太一との十九問答(十一問目～十九問目)
×	×	○「李羲人七問」	李羲人との七問答
×	×	○「長沙王朱星垣二問」	長沙王朱星垣との二問答
×	×	○「伍守虛二問」	伍沖虛との二問答
×	×	○「顧輿叟六問答」	顧輿叟との六問答
○「評古類」	○「評古類」	○「或問十三條」	古人の言に關する十三問答
×	×	○「雜問答三條」	その他三問答
×	×	○「伍真人修仙歌」	「伍真人修仙歌」
○「仙佛合宗語録自序」	×	×	伍守陽「自序」(崇禎七年甲戌[1633])

・ 独自の章題等を有する場合は「 」内に示す。

・ ③のみ全篇に注を含む。

【附表二】輯要本『伍真人丹道九篇』に關連する各テキストの構成

①『沖虛伍真人仙佛合宗語録』 『道德眞源』所收	②『仙佛合宗』 『伍柳仙宗』所收	③『伍真人丹道九篇』 『道藏輯要』畢集所收	
○「仙佛合宗緣起」	×	○「伍真人丹道九篇緣起」	伍守陽「緣起」 (崇禎十三年庚辰 [1640])
○	○	○「伍真人丹道九篇序」	伍守陽「序」(成 立年不詳)
×	○	×	鄧徽績「叙」(光 緒二十三年丁酉 [1897])
○	○	○	「最初還虛第一」
○	○	○	「眞意第二」
○	○	○	「水源清濁眞丹幻 丹第三」
○	○	○	「火足候止火景採 大藥候天機第四」
○	○	○	「七日採大藥天機 第五」
○	○	○	「大藥過關服食天 機第六」
○	○	○	「守中第七」
○	○	○	「出神景出神收神 法第八」
○	○	○	「末後還虛第九」
○	×	○	「後跋」(成立年不 詳)
○	×	○	「邱祖祕傳小周天 歌訣」

・ 独自の章題等を有する場合は「」内に示す。

【附表三】輯要本『仙佛合宗語錄』本文に見られる眞源本『門人問答』に存在しない問答のテーマについて

	卷数：葉数	質問者：収録位置	質問内容(原文)
例 1	畢集一：88a～b	伍太一：五問目に附隨	問曰、玄帝之喻五龍有法象可證者、人可易信。今以蘆芽穿膝爲佛說五龍之喻、以折蘆渡江爲達摩說五龍之喻。但我尙似凡夫之見、同於信心不及。不知何所證據而可令人必信不疑乎。
例 2	畢集一：105a～106b	伍太一：七問目に附隨	又問曰、世之從事仙佛者、皆分爲二宗、各立門戶、以爭高。今獨言、工夫一、景象一、證果一。然觀仙佛之言、若不一。我亦未識其爲一、不能不同世人之分、即不能不疑今一之說。請再詳之。
例 3	畢集二：25b	伍太一：十一問目	十一問曰、今語仙佛所修果同一法、未知古來曾如是說否、後世有知者否。
例 4	畢集二：26b	伍太一：十一問目に附隨	又問、佛既自稱爲仙、不知仙可自言曾與佛是一否。
例 5	畢集二：30a～b	伍太一：十三問目	十三問曰、佛既同於仙。仙有五等、佛門宗有五目、俱相同否。
例 6	畢集二：30b	伍太一：十三問目に附隨	又問、仙宗下以長生爲根基、佛宗下只談凡夫死亡禪。命終而死、以輪迴現而能躲脫爲當機、以生天生爲轉身出頭、謂之沙門四果。仙宗或不言此。
例 7	畢集二：37b	伍太一：十三問目に附隨	又問、今說佛言長生不死、從何證據。
例 8	畢集二：39a	伍太一：十三問目に附隨	又問、何爲小劫中劫之年數。
例 9	畢集二：60a	伍太一：十七問目	十七問曰、仙佛既同一道一修、而又有食葷食素之異、得無畢竟有戒無戒之不同乎。
例10	畢集二：66a	伍太一：十七問目に附隨	又問、佛宗戒殺戒葷之說、云何。
例11	畢集二：67b	伍太一：十八問目	十八問曰、仙教中有以點化成銀、服食昇仙爲言者。佛教中不言此。必此爲仙佛之所以異乎。
例12	畢集二：72a	伍太一：十八問目に附隨	又問、既言仙佛皆有服食之說、是若謂爲有。又云、服外物爲理之必無、是若決言爲無。似兩其說之不同何也。

	卷数：葉数	質問者：収録位置	質問内容(原文)
例13	畢集二：88b	伍太一：十九問目	十九問曰、彼教不信長生、而任其有死者必有後生。抑何所爲不生於天而生於人畜。願語與後學知之。
例14	畢集二：89a	伍太一：十九問目に附隨	又問、若受後有有得人身有得畜身分受之時、抑何可以轉其畜機而生爲人乎。
例15	畢集二：90a～b	伍太一：十九問目に附隨	又問、每見宗門人言了生死、不入輪迴畜道。又卻掃仙佛之道爲不足學。彼自有法愈於仙佛。果然乎不然乎。願說愆聞。
例16	畢集二：90a～b	伍太一：十九問目に附隨	又問、彼以此死爲了生死與不了生死者其差別、何以爲異。
例17	畢集三：4b	李義人：六問目	問之六曰、古禪師有數十年入定而不出者、可同否。
例18	畢集三：8a～b	長沙王朱星垣：二問目	二問曰、聞古人云、仙養神胎、鍊炁化神而出陽神。佛修禪定爲悟道、道成則出定。昨者言、仙全是入定出定、莫是以胎息轉爲入定之名。抑以佛法可擬之仙法否。
例19	畢集三：40a	雜問答：一問目	或問曰、道人爭高曰、仙大謂老子度釋迦成佛。僧人爭高曰、佛大謂仙必參佛而後成真果。有是歟非歟。
例20	畢集三：41b～42a	雜問答：一問目に附隨	又問、東土有此事否。

・仙宗と佛宗の一致や相違を巡る質問のみを掲載